

新日本歌人協会第五十三回  
九州・山口近県集会在熊本

# 実行委員会新聞

二〇一九年三月十日号



熊本支部  
のサイト  
はこちら

## ■「表現者への回帰」記念講演

歌人にとって、歌を詠むとはどういうことなのか、その魅力の根源に触れ、短歌の持つ普遍的な文学性について模索することで、私たちのこれからの創作活動につなげていくことを今回の講演のテーマとしました。講師にお迎えするのは、南阿蘇を拠点に創作活動を続けられている清田由井子氏です。

私たちは短歌を通してありのままの生活を詠み、社会を詠み、そして人々に訴えていく試みを常に心の片隅に意識しながら歌作に取り組んできました。しかしながら、歌そのものに感動がなければ、読者の琴線に触れることはできません。短歌の持つ本来の魅力、人間の奥処の叫びを表現すること、原点に立ち返った歌作とはどういうことなのか、きつと素晴らしい発見があると思います。

## ■ ゆったりとした環境で

前回、6年前の近県集会在阿蘇で開きましたが、今回は交通の利便の良い熊本市で開催します。また、会場の周辺には水前寺公園、熊本近代文学館、熊本県立図書館、江津湖公園があり、県外から参加される方にもきつと喜んでいただけると思います。

## ■ 清田由井子氏に期待します①

近県集会在で講演していただく清田由井子氏は公民館で短歌講座の講師をされ、私も学んでいます。それで、清田先生と呼ばせていただきます。清田先生は雄大な阿蘇に生まれ、その地を棲み処として活動されていますが、自然の中に身を置きつつ、裡なる慟哭ともいえる叫びを野辺の自然に重ねた作品は美しく、時に荒々しく迫ってきます。その時、歌は感動してこそ歌となりえると思付かれます。清田先生の歌は一見すると自然詠のようですが、実は人間の業を三十一文字に凝縮させ、自然の形を借りてその輪郭を顕してくるのです。

私はリアリズム短歌を歌おうとするとき、人間の業と常につながった作品でなければ現実世界の生き様や苦悩は伝わらないのではないかと、ひいては「スローガン短歌からの決別」へのヒントを発見できるのではないのか、先生のお話に大いに期待しています。(大畑靖夫)

### 清田由井子氏の主な歌集・歌論書

- 「歌は志の之くところ」 ながらみ書房 -- 2016
- 「歌集 古緋」 角川学芸出版 -- 2014
- 「歌集 歌」 角川書店 -- 2011
- 「歌集 讃花」 雁書館 -- 1994
- 「歌集 夢やむらさき」 雁書館 -- 1988
- 「歌集 草峠」 雁書館 -- 1983

## 菊池恵楓園の歌人たち 1

熊本のハンセン病国立療養所・菊池恵楓園(檜の影短歌会)で活動した歌人の秀歌です。選歌(寺内實)

伊藤 保

朝あさに靄たちはるる裏山にもゆる  
襟の花ちかく見ゆ

砂庭に今朝流れある雪解みづ杉菜の  
芽立ち押し浸しゆく

をさな子の浴衣を解きてつぎ足しし  
赤いろ滲む繻帯を巻く(戦時中)

戦争に力かさざりしとは何を言ふ木  
の葉を繻帯に巻き堪えて来にしを

響よもして地震すぐるとき標本壇に嬰兒  
ら揺るるなかの亡き吾子

子をふたり墮ろしきてなほも豊かな  
る項はすがしわが前に顫ふ

茗荷の葉にのぼりし螢はたちゆきぬ  
妻の怒りてなげうちし螢

汗あせいでず膚痺れてゆく妻の身をかき  
むしるを抱きて泣きぬ

ついに無処置となりていくとせ病め  
る身の唇縫ひあげ飯食まむとす

厳しかる世に苦しみて生きる身を男の  
この匂ひも無きと妻言ふ

吾子を墮ろしし妻のかなしき胎盤を埋  
めむときて極りて嘗む

檜の山の苔のしめりに山蛙ことしも生  
れてこゑを震はす

うつし糸を父が送ると言ひ来しがまな  
こ見えねば断りにけり

松の木を吹きゆく風にきき入れれば折々  
に音の異なるかも

電燈の光かそかに眼に入れば今宵の我  
の心明るむ

寝返りをすでになし得ず瘦せはてし友  
の自殺未遂はいたましかりき

日時計のあるところまで探り来て歩み  
をかへす夕つ日の中

病みこやる身も下駄と足袋ととのへて  
新しき歳向かへむとすも

弟が妻めとれるを人づてに聞きて知り  
たり病む兄我れは

胸に打ちし注射のいたみ残りぬて我生  
きてありかたじけなけれ享年六九才。

(支部機関誌「短歌あごら」一号より二首)  
百年の隔離の庭に立ちてきし桜いつしか大樹となれり  
ふるさとに帰れずねむる三千人納骨堂に花散りやます

近県集会の実行委員長を務められる國宗黎さんは、熊本市支部の立ち上げに尽力され、前身である年金者短歌サークル



の創立者でもあります。薔薇作りの名人で、自然に対する視点が鋭く、花を詠んだ作品も多くあります。いつも穏やかな表情で、歌会の雰囲気と和ませて下さいます。

### 國宗黎さん

## 実行委員のご紹介

(文 大畑靖夫)

### 寺内實さん



短歌を知り尽くした、押しも押されぬ歌人です。歌歴も長く、定例歌会では、誤用や、文法の誤りも的確に指摘、心強いお師匠さんの存在です。社会の不条理を鮮明

に浮かびあがらせ、かつ洗練された流れるようなリズムをもった作品は新鮮です。一泊二日の小旅行で100首、一晩に50首も作る短歌の超人です。近県集会では、実作を通して歌会をリードしてもらえないかと期待しています。

(支部機関誌「短歌あごら」四号より二首)

メメントモリメメントモリと唱えつつ今日また読みぬいのちの一首  
羽ばたいてひとひらの歌となる鳥よ眩しき朝のひかりを昇れ

近県集会でもっとも盛り上がるのが交流会です。が、今回も熊本では、短歌と正面から対峙した交流会を目指しています。各県代表の出し物については、「短歌」という共通テーマに沿った内容になるようご協力をお願いします。

朗読、輪読、映像、創作劇、歌会の紹介、表現方法も自由です。制限時間は一〇分、短歌を究め、短歌にどっぷり浸る交流会を期待しています。

さて、成功するのか、企画倒れになるのか、鍵は参加された皆さんにかかっています。

自由な発想で、あなたの支部・個人の短歌に対する意気込みを表現して下さい。

## 今回もやります歌人のための大交流会

### 春宵合評会のご案内

十二日夜

今回はゆつくりとしたスペースでの二次会を兼ねた真面目な即詠歌の合評会を開きます。もちろん、自由参加で、参加されなかった方にも即詠会詠草集をお配りします。春の宵を惜しみ、自由闊達な歌論を繰り広げましょう。

\*吟行会参加の方は、ご希望の場所への送迎をします。ホテルの周辺の散策も可能です。

### ■即詠会のご案内

講演会終了後、近くの散策スポットをご案内します。

#### Aコース 水前寺成趣園

桃山式の回遊庭園。寛永九年(1632年)、肥後細川初代藩主・細川忠利公が御茶屋を置いたところ、その後、三代目藩主綱利公のときに庭園が完成し、中国・東晋時代の詩人陶淵明の詩「歸去來の辞」に因み、成趣園と名づけられました。東海道五十三次を模した池が配され、ゆるやかな起伏の築山とともに、庭園美を楽しめます。

#### Bコース くまもと文学・歴史館と上江津湖

俳人中村貞女、安永露子が多く作品を育んだ江津湖。くまもと文学・歴史館には小泉八雲や夏目漱石など熊本ゆかりの文学者の原稿や遺品などの近代文学資料に加え、熊本県立図書館が所蔵する江戸時代の熊本藩の検地帳や絵図、人吉藩主相良氏の古文書、明治時代の県関係公文書など熊本に伝わる貴重な「本物」の歴史資料を展示しています。

### ■熊本支部のご紹介

新日本歌人協会熊本支部は、毎月第三日曜日(月によって変更有り)の午後、定例歌会を開催しています。十一名の参加で、一人あたり三首から八首の詠草を提出、無記名の詠草集から順番に参加者で鑑賞・批評していきます。二〇〇三年十二月から現在まで、休み無く開催し、二〇一九年二月現在、一六五回目の歌会を迎えました。

熊本支部の特徴は、歌歴の長い熟練した歌人とフレッシュな初心者と、互いに刺激し合って、常に真剣に歌会に臨んでいることに尽きます。単に短歌の習得ではなく、歌を通して自分の内なる思いをどう表現していくのか、表現者として切磋琢磨に励んでいることが、歌会の活性化にもつながっているようです。また、少なくないメンバーが、支部の例会だけでなく、個々に別の短歌教室にも通って、良いものはすべて習得するという努力が、作品の質の向上につながっているのです。



熊本支部の定例歌会